

ストア派における「述語」について

—ドゥルーズを契機にして

慶應義塾大学言語文化研究所

樋笠 勝士

序

ストア派の学問には三領域があるが、それらは相互浸透していることで知られている。従って、論理や言語を扱う「ことばの学 (λογιστικόν)」も、存在や世界を論じる「自然学 (φυσικόν)」と、そして人間や生活を論じる「倫理学 (ἠθικόν)」と深い関係をもっていることになる。本論で扱う「述語」という問題も同様である。述語は、一方では、存在の類として考えられている。存在についての述語は、様々な存在のあり方を表す言葉や概念をつくることになるが、ストア派の場合、存在が最高類のではなく、存在と非存在を越える別の最高類が考えられている関係で、存在の述語は、存在のみに関わるという限定を受けている。他方で、述語は主語について述べるものでもある。主語は名詞でなければならないが、述語は動詞を伴わないわけにいかないのが、基本的な構成は名詞と動詞になり、言語を構成する。そして言語構成でもって命題論理学を考察して行くのがストア派である。それは、言語としては、一方では音声という物体でありつつ、他方では意味という非物体でもあるから、そこに存在論的な視点があると言わねばならない。さらには、どのような主述構成にするかによって人間の行動が変わってくるし、そこに習慣化もあるだろうから、非物体的側面を

ストア派における「述語」について（樋笠）

もつ言語構成と、物体（魂や身体）の活動との結びつきが、倫理学を指標としてゆくことも容易に想像できよう。こうして述語を問題にするとしても、存在論や倫理学と関わらざるをえないストア派の特殊な状況を考えねばならないのである。

さて、ストア派において「あること」の意味を担う動詞は εἶμι と ὑφίστημι である。いずれも基本動詞であり、その意味は多義的でありながらも、事物の存在性格を表すために哲学用語化されているものである。さしあたり、前者は物体としての実在性を表し、後者は非物体としての思念的仮構事象性を表すとすることができる。前者は、唯物思想をもつストア派においては、実在が真実在性をもつがゆえに、或いは実在性の概念が世界観や価値観と繋がざるをえないため、決定的に重要であることは明らかである。他方で、後者は、言語上の存在性格をもち、言わば「意味」の次元のものとして、ストア派が論理学を構築して行くのに大きく役立つ領野に位置する以上、これもまた極めて重要な役割を担っていると言わねばならない。とするならば、問題としては、実在的存在と意味的存在の関係、或いは物理的事象と言語的事象の関係といった現代的課題が既にそこにあるということもできよう。

さて、ドゥルーズはブレイエのストア派解釈に従いつつ、自らの「意味」論の構築に関してストア派解釈を試み、その言語思想を受容した。ここでは、ドゥルーズの言う「意味」が、ストア派の言う「意味」と重なり合う議論が、一定の意義をもって現れている。その意義とは、「意味」のもつ動的な要素である。本稿では、「意味」が魂の動的生成的な働きをなすものであることを、ドゥルーズのストア派解釈を契機に、ストア派そのものにおいて示したいと思う。

このような意図の下に、以下の構成で論じることにした。まず、第一節では、ドゥルーズの『意味の論理学』がストア派の「意味」をどのように掬い取っているのか、その問題性を明らかにする。そこで論じられる「述語」形成の問題を、ストア派において論じるが、それに先だって、第

二節にて、「意味」の非存在的なあり方を明らかにするために、ストア派の存在論がどのようなものであるかを確認し、その特徴を明確にする。そこで、εἶμιとὕφιστημιとが有効に区別されているストア派の存在論的視点を明らかにする。第三節にて、かかる存在論的視点の下、ストア派の述語論において、述語の動的なあり方を論じる。そこでは述語動詞の成立が魂の働きの成果として結果するという議論が明白となろう。

第一節 「クリュシッポス効果」～ドゥルーズ『意味の論理学』

ドゥルーズは『意味の論理学』序文で、ルイス・キャロルとストア派を並べる。そのとき、彼は意味の理論を形成するのはパラドクスのセリーであるとしている。確かに、ルイス・キャロルの提示する作品は、パラドクスに満ちていると言える。しかしストア派は明晰な命題論理学を構築した。この大きな間隙をどのようにしてドゥルーズは埋めるのであろうか。先ず、『意味の論理学』におけるドゥルーズの基本的な立場を確認することから始めよう。

実詞と形容詞が崩れ始め、停止と静止の名詞が、純粋な生成変化の動詞に引きずられて、出来事の言語の中へと滑って行くとき、自我・世界・神にとって、すべての同一性が失われる¹⁾。

実詞 (substantif) とは実体的なものの謂いである。それは、名詞として同一性を保つが、動詞はそうではない。動詞は純粋な生成変化 (pur devenir) であり、出来事 (événement) へと導く。著作冒頭で、ドゥルーズは既にストア派への道筋をつけているようである。なぜなら、ストア

1) G. Deleuze, *Logique du Sens*, Paris, 1969, p. 11. (第1セリー) 訳文については、以下の邦訳を参照したが、ストア派の思想との照合を考慮し適宜修正した。参照、ドゥルーズ『意味の論理学』法政大学出版局、1987年。『意味の論理学 (上・下)』河出文庫、2007年。

派にとって、名詞と動詞の扱いは異なっているからである。ストア派は、先ず、名詞と動詞とを主語と述語に当てて、それらをもって「命題」を構成するものとする。さらに、静的な名詞と動的な動詞という組み合わせは、その品詞として担う役割そのものであるが、そこにおいて、外的指示物との対応において成立する名詞的な同一性と、単独では外的指示物が存在しないという動詞の運動性という特徴もまた、ストア派の言語思想に見いだせるものである。

このような確認の下で、次に、ドゥルーズが、述語として示される動詞を、「出来事」や「非物体的な効果」と呼ぶところを見てみよう。

効果は、名詞や形容詞ではなく、動詞である。効果は能動者や受動者ではなく、能動と受動の結果であり、非受動的なもの、非受動的な結果である。…物体の深層の中にあるものは混合である。物体は別の物体に入り込み、別の物体のあらゆる部分の中で共存する。…「切ること」「切られること」などで言いたいことは、…もはや事物の状態や物体の底での混合ではなく、混合に由来する表面での非物体的な出来事のことである²⁾。

「効果・結果 (effet)」は動詞である。すなわち、「効果」は、同一性無き生成変化のことであり、物体的な作用である能動と受動とは関係ないから、物体に入り込むこともなく物体と共存することもない。従って、「効果」は非物体的な結果である。ここで重要なのは「効果」が動詞である、という点である。そこにストア派に通じる理解がある。ストア派では、物体の実在性を説明する根拠が能動と受動であるのに対して、能動も受動もない動詞は、全くの非実在性・非物体性をもつことになるからである。また、物体の領域（これをドゥルーズは「深層」と呼ぶ）では、区別される

2) *op. cit.*, p. 13-4. (第2セリー) impassible という語は、唯物思想のストア派にあっては、非物体的な「意味」が物体的な能動と受動の作用関連の域外にある以上、「物体的な作用を受けない」という意味をもつと思われる。

部分もなく完全に融合した「混合」の状態にあるのに対して、非物体の領域（これをドゥルーズは「表面」と呼ぶ）では述語動詞のように「出来事」が成り立っている、という点も、ストア派の正しい理解として重要である。

こうして、ドゥルーズは、「効果」の存在論的性格を論じるために、ストア派の存在には二種類あるとするブレイエを引用する。その引用文中に、「メスが肉を切る」という事例において、物体メスが、切られる肉に対して「切られる」という属性（存在ではなく、存在の様式であり、動詞によって表される）を与えるという説明が登場する³⁾。ここで「メス」も「肉」も物体であり、また名詞であるが、「切られる」は非物体であり、動詞である。ドゥルーズは、ブレイエの説明に即しつつ、後者に、事実としての「表面性」を読み取っていく。すなわち「メス」も「肉」も言語上は名詞的に区別され、ある種の同一性をたもっているが、物体の深層においては両者は相互に浸透し混合しているのである。混合している中で、影響や作用や運動といった変化は、物体らしく能動と受動として説明されるのである。他方、物体ではない「切られる」は、言語上は動詞であるが、非物体である以上、物理的な能動と受動では説明されない。しかし、一種の結果なのである。物体の表面に生じた出来事としての効果である。この原因と結果の関係はアンバランスである。原因とは、能動と受動の物体同士の関係においてのみ成り立つ実在的存在であるが、結果は、物的な能動と受動の作用関係とは無縁であるため、原因による物的な作用を受けない仮構的存在である。従って、実は、いわゆる「原因」と結びついた意味での「結果」とも言い難いのであり、ドゥルーズは「効果」と言いつつも、「光学効果」「音響効果」「言葉の効果」などの用例を並置させることで⁴⁾、原因と結果が同次元にはないこと、むしろ結果は存在論的次元を逸脱する

3) *op. cit.*, p. 14. (第2セリー) この「原因と結果」論は第三節のストア派のそれにて再び扱う。

4) *op. cit.*, p. 17. (第2セリー) effets sonores, optiques ou de langage.

ものであることを強調している。この点はストア派が語りきれなかったことをドゥルーズが補っているようにも捉えられるであろう。ドゥルーズは、「非存在且つ非物体としての効果」を、物体の深層から浮上してきた「表面」とし、「ストア派は表面効果 (les effets de surface) を発見した⁵⁾」と言う。まさに「メス」や「肉」と違って、「表面効果」においては、「切る」でも「切られる」でもどちらでも可能である。これこそ「出来事」に相応しい仮構の動態であると言えるのである。ここから、ドゥルーズは独自性を発揮するが、表面効果を、ルイス・キャロルのパラドクス、すなわち表面での出来事の拡大としてとらえてゆくのである。では、「効果」とパラドクスはどのように関係するのであろうか。

ルイス・キャロルにあるパラドクスの要素は、並行する二つの系列（セリー）にある矛盾の共存として成り立っている。ストア派が「無意味 (non-sens)」とした blituri の語を、別系列の語 skindapsos の語で意味させるように、意味は常に別の言葉の系列（セリー）の意味によって反照的に関係することによって動態的に成り立っている⁶⁾、という点で、意味はどこまでいっても、意味を生成する言語空間のなかに自己を留めているのである。これはストア派が論理的（＝言語学的）空間の中に意味の全領域を込めた目論見に沿う理解である。また、実際、ストア派は論理的論述の中で、多くのパラドクスの命題や言説をとりあげ、その意味論的分析を「ことばの学」の営為としていたことがわかっている⁷⁾。「無意味の意味」の探究があったのである。ドゥルーズも同様であり、「無方向 (non-sens)」に方向を与える意味論的動性を問題にしているのであって、

5) *op. cit.*, p. 17-8. (第2セリー)

6) *op. cit.*, p. 83. (第11セリー) blituri の語も skindapsos の語も、ストア派が共に「意味の無い語」として例示しているものであるが、ドゥルーズは、ここで、「パラドクスの要素」が、一つの X をもつ（＝何れの語も同じ「無意味」である）と同時に、二つの顔をもつ（＝blituri は「語 (mot)」であり、skindapsos は「事物 (chose)」である）としている。

7) 例えばクリュシッポスにおける「詭弁駁論」の部門で「嘘つき」や「誰でも…ない」議論はパラドクス意味論の典型かもしれないが、ストア派が「大地は飛ぶ」のような不可能命題も命題の一種として論の構成に役立てている事実も挙げてよいであろう。cf., SVF, 2, 272., SVF, 2, 201ff.

従って、その立場から当然のようにして「無意味は、意義の決定だけでなく、意味の贈与をも行う」と主張することになる。言い換えれば、別系列の言葉の意味を介入させる限り、どのような無意味も意味となるという点で、意味とは「常に生産される非物体的な効果 (effet incorporel, toujours produit)」なのである。これが「クリュシッポス効果」と呼ばれるのである⁸⁾。

まとめておこう。ドゥルーズはストア派に従って、述語動詞を、物的な原因の、非物体的な「結果・効果」としてとらえる。これは、「出来事」として、「意味」として、常に意味を生成し贈与する。そして、出来事の領域は、物的な領域と違って、非存在でありながら、意味の永遠なる生産を行う生成変化、つまり動詞的な働きをなす場でもある。

「意味」とは、ドゥルーズにとってもストア派にとっても、とうてい「ある (εἶμι)」という確定性や同一性を保つものは言えない存在性格をもっている。その存在性格に存在性を見いだすとしても、それは動(詞)の生成的な「出来事」というあり方のみである。それは、ストア派が、「存在」に対して「存立」と表現した存在性であり、それはまさに動詞的な働きをもつものなのである。

第二節 ストア派における「存立」について

ドゥルーズは、「意味」が「存在の外 (extra-être)」であり、また「非存在に適合する何か (un aliquid qui convient au non-être)」であり、そして、命題の中で「存立する (insister ou subsister)」とした⁹⁾。これらはストア派の「非存在 (μη ὄν)」や「何か (τι)」、そして「存立するもの

8) *op. cit.*, p. 88. (第11セリー)「ナンセンスは、意味をもたないものであると同時に意味の贈与を行うことによって、意味の不在に対立している」。「クリュシッポス効果」は「キャロル効果」とも呼ばれている。

9) *op. cit.*, p. 44-5. (第5セリー)

ストア派における「述語」について（樋笠）

（τὸ ὑφεστός）」に相当する。では、ストア派の存在論はどのようになっているのか、これを確認しておこう。

さて、ストア派の存在論は、存在の最高類を「存在（ὄν）」とせずに、「何か・或るもの（τι）」としたことでよく知られている。それは、先ず以て「存在するもの（ὄν）」と「存在しないもの（μὴ ὄν）」とを統括する高次の類概念であるが、しかし、高次の類として受け入れるとしても、「何か」という表現や意味のもつ積極的な意義は何か、「存在ではないもの」とはどのような存在論的位置をもたされているのか、さらには、そもそも「存在の最高類（γενικώτατον）」という視点をストア派がどの程度、自覚的にもっていたのか、などの問題がある。これらについては様々に論じられてきたが、資料問題もあり、その内実は未だ明確とはいえない。従って、彼らの「何か」を理解するためには、最大公約数的なアプローチによるしかないとしても、先ずは、「何か」に関する問題意識を明確にすべきということになる。

ストア派は唯物論的思想をもつ点で、存在するもの（ὄν）はそのまま物体（σῶμα）であることになる。ここで言う物体が、我々にとって理解する物理的事象としての物体と同じ意味をもつかどうかは不明ではあるが、しかし知覚の対象として、素材的事物として、物理的作用のうちにあるものとして考えられている限りにおいて、ほぼ似た意味であろうと受け止められる。すると、物体即存在という考えの下で、徹底した唯物論思想が展開されそうであるが、実際はそうではなく、反対に、言わば精神的仮構物についても強い関心を彼らは示している¹⁰⁾。それは、存在しないもの（μὴ ὄν）と呼ばれ、そのまま非物体的なもの（ἀσώματον）として理解されているのである。この「存在・物体」と「非存在・非物体」の二つを統括する存在の最高類が「何か（τι）」である。それを見てみよう。

10) ストア派では、魂も物体である。物体としての魂の活動には意識や思惟があるが、このような魂の物的な事象に対応する仕方で「存立」するのが言語的な「意味」の非物的な事象である。

ストア派の哲学者は、時間を非物体であると考えた。彼らの主張では、「何か」のうち物体と非物体とがあり、非物体のうちには、レクトン、空虚、場所、時間という四種類が数えられる。このことから、彼らが時間を非物体と考えていることだけでなく、それ自体として思惟されるものと考えていることも明らかになる¹¹⁾。

セクストゥス・エムピリクスが伝える上記の断片は、非物的なものうち四種を数えており、「思惟されるもの」と見なしていることがわかる。実際、「非物的なもの」とは、発音される物的な音響に対応して、並行的に精神的仮構物として成立しているレクトン（語られるもの）の概念を基準にして理解すれば、物理的物体の外的現象と影響関係無しに並行しつつ、思念的な次元で成立している空虚や場所や時間やレクトンは、我々にとっては「意味」的な存在であるという差し支えないであろう。それは物体としての魂の働きにおける内的要素であるから、人間の生活の中では否定できない現実を表しているとも言えよう。我々の現実的な生は、例えば「いつ」「どこで」を常に特定している。それでもって物理的世界に区別や限定を与え、意味づけしていると言えるが、しかし、実際、物理的世界が、与えられた意味づけと同じような構成をとっているかどうかについては別問題であろう。例えば、「原因と結果」という考え方も、本当に物理的領野に実在するかどうかという視点は、ストア派にとって大きな問題であり、このような問題意識が彼ら特有の存在論を構築させたとも言いうるのである。簡単に言えば、そこには物理事象と意味事象とを各々独立的に並行的に、しかし、その関係を積極的に論じようとする姿勢がある。

11) *SVF*, 2 331, οἱ δὲ ἀπὸ τῆς στοᾶς φιλόσοφοι ἀσωμάτων αὐτὸν φήθησαν ὑπάρχειν· τῶν γὰρ τινῶν φασὶ τὰ μὲν εἶναι σώματα τὰ δὲ ἀσώματα, τῶν δὲ ἀσωμάτων τέσσαρα εἶδη καταριθμοῦνται ὡς λεκτὸν καὶ κενὸν καὶ τόπον καὶ χρόνον. ἐξ οὗ δῆλον γίγνεται ὅτι πρὸς τῷ ἀσωμάτων ὑπολαμβάνειν τὸν χρόνον, ἔτι καὶ καθ' αὐτὸ τὸ νοούμενον πρᾶγμα δοξάζουσι τοῦτον.

ストア派における「述語」について（樋笠）

従って、このような現実理解と問題意識から、「物体」と「非物的なもの」とを括る高次の概念を必要としたであろうことは予想できるのである。この点で、アフロディシアのアレクサンドロス¹²⁾は、ストア派に対して批判的ではあっても、一定の理解を示していると言える。

ストア派の人々が、「何か」を存在の類として立てていることが妥当ではないことを以下の様に示すことができるであろう。なぜなら、「何か」であるならば、存在でもあることが明らかであり、存在であれば存在の定義を受け入れることになるからである。しかし、彼らは、存在ということが、物体だけに述語づけられるという規則を自らに立てたので、この問題を逃れることになる。すなわち、彼らは、そこから、「何か」が物体よりも上位の類であると主張しているのであって、「何か」は、物体だけでなく、非物的なものにも述語づけられるのである¹²⁾。

ここで問題となっているのは「存在の類 (γένος τοῦ ὄντος)」の意味であろう。「何か」は存在も非存在も含むが故に、「存在の類」を超える高次のものになっている点が明確に伝えられている。また、存在と物体とを直接結びつける文言もあり、存在即物体の考え方が明らかである。さらに、存在と同様に「何か」もまた、アリストテレス以来の伝統的な理解の下、述語づけるといふ言語的文脈におかれていることも分かる。

「存在しないもの (μη ὄν)」における四種と同様に、「存在するもの (ὄν)」にも四種の存在の述語（基体・性質・様態・関係）があることが伝わっているが、これらについては、アリストテレスのカテゴリー論との影響関係についての論争があった¹³⁾。これら以外に、第三の分類（「何かで

12) *SVF*, 2 329, οὗτω δεικνύουσιν ἄν ὅτι μὴ καλῶς τὸ τί οἱ ἀπὸ τῆς Στωῆς γένος τοῦ ὄντος τίθενται · εἰ γὰρ τί, δῆλον ὅτι καὶ ὄν · εἰ δὲ ὄν, τὸν τοῦ ὄντος ἀναδέχοιτο ἄν λόγον · ἀλλ' ἐκεῖνοι νομοθετήσαντες αὐτοῖς τὸ ὄν κατὰ σωματίων μόνων λέγεσθαι, διαφεύγειεν ἂν τὸ ἠπορημένον · διὰ τοῦτο γὰρ τὸ τί γενικώτερον αὐτοῦ φασιν εἶναι, κατηγορούμενον οὐ κατὰ σωματίων μόνον, ἀλλὰ καὶ κατὰ ἀσωμάτων.

13) cf. F.H.Sandbach, *Aristotle and the Stoics*, Cambridge, 1985. アリストテレスの影響を

ないもの (οὐ τι)) も伝えられているが、そもそも人間の思念像や観念などの精神的仮構物の所在について明確なものが伝わっていない分だけ多くの批判を浴びる結果となっている実情がある¹⁴⁾。

さて、ブランシュヴィックによれば、「何か」という最高類に関して、主要なテキストにおいて共通している事項をまとめた存在の分類は以下のようになる¹⁵⁾。

- ①「何か」は、それが物体であるとき、存在するが、物体ではないとき、存在しない。
- ②「非物体 (ἀσώματον)」と言われるものは、非物体的な諸物のすべてを指すのではなく、限られた諸物つまり、空虚・場所・時間・レクトン (λέκτα) を指す。(四者は、非物体的なものとして正統的である)。
- ③物体と非物体的なものは「何か」と呼ばれる。
- ④「何かでないもの (οὐ τι)」は、概念 (ἐννοήματα) としての存在論的な地位を示す。

また、ロング&セドレーも「何か」を最高類とする分類を図表化している¹⁶⁾。

見積もる見方は少ない。むしろ、当時のアカデメイアにおいて使用された術語や概念に基づいたものであると考える方が自然である。

14) SVF, 2, 330, 「何かでないもの」は思考にとって「存立していない (ἀνυπόστατα)」と言われている。虚構などの構築物についてはセネカも伝えているが、「何か」のうちの「存在しないもの」に入っている。cf. SVF, 2, 332, 「ストア派のある人々は『何か』を最高類と考えているが、…彼らの言うには、事物の自然本性のうちでは、或るものは存在するが、或るものは存在しない、だが事物の自然本性は、心に思いつくような存在しないものをも包含している。例えば、ケンタウロスや巨人、その他何であれ、虚偽の思考によってつくられ、実体がないにもかかわらず、何らかの表象をもつものがそうである」 *primum genus Stoicis quibusdam videtur quid ; …in rerum, inquit, natura quaedam sunt, quaedam non sunt. et haec autem, quae non sunt, rerum natura complectitur, quae animo succurrunt, tamquam Centauri, Gigantes, et quicquid aliud falso cogitatione formatum habere aliquam imaginem coepit, quamvis non habeat substantiam.*

15) J. Brunschwig, *Papers in Hellenistic philosophy*, Cambridge, 1994, pp. 92.

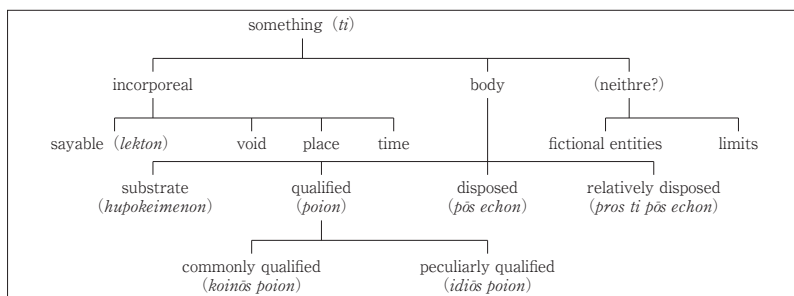
16) A. A. Long & D. N. Sedley, *The Hellenistic philosophy*, vol. 1, Cambridge, 1987, p.

ここで注目したいのは、「非物的なもの」「非存在のもの」の存在性格を語るために用いられる動詞である。この領野では、物理的な事物とは別に成立しており、この領野の説明のために物体の実在性を表わしてしまう「存在 (εἶναι)」という動詞を全体的に用いることはできない。しかし、「非物的なもの・非存在のもの」の事実は、すなわち意味的事象の事実は、人間の内的精神的経験の現実がある以上、何らかの意味において別の仕方では存在していると言う必要がある。これをストア派は「存立 (ὕφιστάναι)」という動詞で表している。プロクロスの断片によれば以下の通りである。

ストア派は、単純な観念に従って、時間を儂い、非存在にきわめて近いものとしたし、¹⁷⁾、というのは、彼らの間では、時間は非物的なものの一つであり、非物的なものは作用をなさぬもの、存在せずに単純な観念の中でのみ存立するもの (ὕφιστάμενα) として軽蔑されているからであるが、彼らは時間を動の付帯的な属性だと言う人々である¹⁷⁾。

ストア派において、存立を語る動詞 <ὕφιστάναι> に注目してきた研究

163. Brunschwig は、存在の分類について、更に資料単位で分類のパターンを複数の図表化で表している (*ibid.*, pp. 92ff.)。



17) SVF, 2, 521, οἱ μὲν κατ' ἐπίνοιαν ψιλὴν αὐτὸν συνιστάντες ἀμενηνὸν καὶ ἔγγιστα τοῦ μὴ ὄντος · ἐν γὰρ ἦν τὸν παρ' αὐτοῖς ἀσωμάωτων ὁ χρόνος, ἃ δὲ καταπεφρόνηται παρ' αὐτοῖς ὡς ἀδρανῆ καὶ οὐκ ὄντα καὶ ἐν ἐπινοίας ὑφιστάμενα ψιλᾶς · οἱ δὲ συμβεβηκὸς τῆς κινήσεως λέγοντες.

は多い¹⁸⁾。ストア派が、なぜ「存在するもの」と「存在しないもの」のあり方とを、それを語る「存在する」と「存立する」の区別にまで至って表すのかについては、直覚的表象の真理把握の問題が背景にあるともされている¹⁹⁾。例えば、体育や軍事教練などで目の前の身体運動を模範として直接的な教育を受ける人々の認識と類比的に、彼らには「あたかも魂に直接触れるかの如くに、魂の主導的部分に痕跡を残す認識がある」とされる。この認識において、ストア派は物体の場合を考えているが、非物的なレクトンの場合は、魂の主導的部分は、「～について (*ἐπι*) の表象はあるが、～によって (*ὑπό*) の表象はもたない」として、その表象認識の間接性、或いは实在認識の問題を考えているといえる²⁰⁾。

以上から、ストア派が、存在性格について少なくとも二重に考えていたことは確かである。この場合、精神的仮構物の場となる「非物的なもの・非存在」が「存立」という存在形式をそなえ、それが論理学分野として展開してゆくことを考慮すれば、その重要性もまた明らかであろう。ここから、ガレノスの批判的な断片のように、二つの動詞で単純化して、二領域化する伝承が現れるのも、当然であると思われる。

わたしが細かな区別であると言うのは、存在するものと存立するものとを種類として分けるような（ストア派の）やり方のことである²¹⁾。

「存在／物体」と「非存在／非物体」の対立よりも、「存在」と「存立」

18) 例えば、Hadot, Graeser, Goldschmidt, Sandbach, Rist など。かつては、違いを考えず、*ὑφίστημι* はストア初期では *εἶναι* であったとする見解もあった。古典ギリシャ語文献全体の中でも意味の差を強調する文献は少ない。cf. A. A. Long, *Language and Thought in Stoicism*, in A. A. Long (ed.), *Problems in Stoicism*, The Athlone Press, 1996 (rep.), pp. 89ff.

19) J. Brunschwig, *ibid.*, p. 158ff.

20) *SVF*, 2, 85. 物体は同じ物体に対して能動的作用者になれるが、非物体は物体の（「～によって」の）動作主にはなれない。非物体は、物体のもつ「能動・受動」の物質的な働きができないからである。

21) *SVF*, 2, 322. λέγω δὲ μικρολογίαν, ἐν ἣ διαίρουνται κατὰ γένη τὸ τε ὄν καὶ τὸ ὑφεστός.

ストア派における「述語」について（樋笠）

の対立を優先する見方は、単純化の度も高いし誤解も生むかもしれないが、しかし、物理事象と意味事象の対立という明解な立場を強く印象づけて行くであろう。そうであれば、「存在」と「非存在」とを含めた最高類であった「何か」は、その全体が「存立」するというよりも、「非存在」の側に立つ「存立」として、「存在」と対立することになり、結果として、「何か」は「存立するもの」と同定されることになるのである。つまり「何か」こそ、非物的な意味事象として存立することになるのである²²⁾。

第三節 「結果・効果」として「存立」する「述語動詞」

1) 「存立」としての述語動詞²³⁾

ストア派が世界の存在について語るとき、世界そのものについてと、それを語る言葉とに対して、できるだけ混同しないように留意したであろうことは（或いは、敢えて交錯する仕方で積極的に語ろうとしたことは）、三学問（自然学・ことばの学・倫理学）の相互浸透の実際から容易にくみ取ることができる。では、物理事象と意味事象との連関は、「存立」に關連する限りで、どのように考えられたのであろうか。それは「原因と結果」という、事例を伴う説明においてよく示されている。セクストゥス・エンピリコスとアレキサンドリアのクレメンスの断片を見てみよう。

（ストア派が）あらゆる物体は原因であり、物体にとって非物的な何かの原因となると主張しているからには、医者メスのメスは物体であり、物体である身体にとって「切られる」という非物的な述語の原因となり、また火は物体であり、物体である木材にとって「焼かれる」という非物的

22) 註6参照。ドゥルーズは、一方で、ストア派の最高の類である「何か (aliquid)」が、存在と非存在を包摂するものとして正しく理解しているが、他方で、「意味」を語るときには、それを「何か」や「非存在」と同定している。cf. G. Deleuze, *op. cit.*, p. 16. (第2セリ一) ; p. 34. (第3セリ一)

23) 「述語」の語は、以下、存在の類ではなく、主語に結合される述語の意味で用いる。

述語の原因になる²⁴⁾。

丸天井の上の石はお互いにとって「落ちずに留まっている」という述語の原因であるが、お互いの原因ではない。…小刀は肉にとって「切られる」ことの原因であり、肉は小刀にとって「切る」ことの原因である²⁵⁾。

ここでは、医者が手術をする場面で、メスで身体を切るとき、外的な世界で生じていることと、それを言語化することとが、交錯する仕方
で語られている。これを〈原因と結果〉という系列でまとめれば、原因は
物体であるが、結果は非物体的な述語となる。文章で表せば「メスによ
って身体は切られた」となる。二つの物体「メスと身体」「火と木材」「丸
天井の石と石」は〈原因と結果〉の系列には入らないのである。これは、
ストア派が自然学的な立場から、「原因」を厳格に考えており、能動的な
作用者のみ原因に値すると考えていることに存するが、同時に、物体の変
容に関する根本的な相互浸透的融合的連続的な見方にも基づいていると言
える。つまり、彼らにとって、主語が物体に直接的に対応して、同一性を
たもつ実体詞として言語化される一方で、述語（動詞）の方は、魂の思惟
によって抽象化²⁶⁾された物体の動的な有様が、同一性をたもてない非物
体的な形式で言語化された結果なのである。この「結果」こそ、述語とし
て表された精神的仮構物（存在しないもの・存立するもの）なのである。
これを別の断片でも確認しよう。

ゼノンは言う。原因とは「それによって」というものである。或るもの
(X)の原因である、という場合の或るもの(X)は付帯的なものである。

24) *SVF*, 2, 341. εἴγε Στωικοὶ μὲν πᾶν αἴτιον σώμα φασὶ σώματι ἄσωμάτου τινὸς αἴτιον γίνεσθαι, οἶον σώμα μὲν τὸ σμιλίον, σώματι δὲ τῇ σαρκί, ἄσωμάτου δὲ τοῦ τέμνεσθαι κατηγορήματος, καὶ πάλιν σώμα μὲν τὸ πῦρ, σώματι δὲ τῷ ξύλῳ, ἄσωμάτου δὲ τοῦ καίεσθαι κατηγορήματος.

25) *SVF*, 2, 349. οἱ ἐπὶ τῆς ψαλίδος λίθοι ἀλλήλοισι εἰσὶν αἴτιοι τοῦ μένειν κατηγορήματος, ἀλλήλων δὲ οὐκ εἰσὶν αἴτιοι…… ἡ μὲν γὰρ τῇ σαρκὶ τοῦ τέμνεσθαι, ἡ σὰρξ δὲ τῇ μαχαίρᾳ (μαχαίρα) τοῦ τέμνειν.

26) A. A. Long & D. N. Sedley, *ibid.*, p. 200.

原因は物体であり、その或るもの（X）の原因である、という場合の或るもの（X）はカテゴリーである。原因があるのに、それがその原因であるところの当のものが存在しないことは不可能である。ここで言われていることは以下の意味である。原因とは、それによって何かが生じるところのものである。例えば、思慮によって「思慮する」が生じ、魂によって「生きる」が生じ、節制によって「節制である」が生じる²⁷⁾。

クリュシッポスは、原因とは「それによって」というものであると主張している。原因は存在するものであり原因であるが、或るものの原因である、という場合の或るものは、存在するものでもないし、物体でもない²⁸⁾。

ストア派が自然学的な〈原因・結果〉概念において、物理的事象とそれを語る言語的事象とを同時に考察していたことがわかる。さらに、ここでは「思慮」は物的原因であり、「思慮する」は非物的な述語である。非物的な述語については、そこにおいて、意志や欲望の契機となり、そこから、ストア派の言語的表象による認識の過程が、事象把握と言語形成とを共存させた倫理学を構成して行く点は一層明らかにしなければならない

27) *SVF*, 1, 89. αἴτιον δ' ὁ Ζήνων φησὶν εἶναι δι' ὃ οὐδὲ αἴτιον συμβεβηκός· καὶ τὸ μὲν αἴτιον σῶμα, οὐδὲ αἴτιον κατηγορημα· ἀδύνατον δ' εἶναι τὸ μὲν αἴτιον παρεῖναι, οὐδὲ εἶναι αἴτιον μὴ ὑπάρχειν. τὸ δὲ λεγόμενον τοιαύτην ἔχει δύναμιν· αἰτίον ἐστὶ δι' ὃ γίνεταί τι, οἷον διὰ τὴν φρόνησιν γίνεταί το φρονεῖν καὶ διὰ τὴν ψυχὴν γίνεταί τὸ ζῆν καὶ διὰ τὴν σωφροσύνην γίνεταί τὸ σωφρονεῖν. 「思慮」も「節制」も名詞であり、物体である。「知恵」も同様である。「知恵をもつ (have wisdom)」とは物的性質をもつことであるから、そのような表象を得たときには言語化できるし、「知恵をもつ」を欲求することもできる。しかし、『知恵がある (be wise)』をもつとは言えない。「知恵がある」は「知恵をもつ」人に対する表現であり、その表現は物体には還元されない。単に物的対象の相関者に過ぎない。これが述語であり、存立を記述することである。こうして、名詞「知恵」は物体であり、述語「知恵がある」は「物体ではなく物体について語る (Seneca, *Ep.*, 117, 13)」のものである。cf., A. A. Long & D. N. Sedley, *ibid.*, p. 202.

28) *SVF*, 2, 336. Χρῆσιμος αἴτιον εἶναι λέγει δι' ὃ καὶ τὸ μὲν αἴτιον ὄν καὶ σῶμα, οὐδὲ αἴτιον μήτε ὄν, μήτε σῶμα, καὶ αἴτιον μὲν ὅτι, οὐδὲ αἴτιον διὰ τι. αἴτιον δ' εἶναι λόγον αἰτίου, ἢ λόγον τὸν περὶ τοῦ αἰτίου ὡς αἰτίου.

い²⁹⁾。さしあたり、本節では、命題形成（主述のそろった完全なレクトン形成）において、存立の存在論が投影されていることの確認に留めておきたい。とりわけ、述語という動詞的な場面、つまり、外的物体の作用を受けた（物体としての）魂が、そのうちで思惟を開始し、その魂の変容に対応して述語動詞が成立する場面、さらに換言すれば、知覚対象について物的な魂の働きに非物的な効果（結果）が現れる場面、こういった場面に留意しておきたい。それは、おそらくは「出来事」乃至は「事実」と我々が呼ぶところの事象³⁰⁾——この事象に一致する物理的實在が存在せず、また實在そのままではない仕方で動的な出来事として表現したところの事象——であり、ここでは、その意味産出的な動的な事象を強調しておきたいと思う。

2) 衝動理論と述語

ここで問われるべきは、「効果（結果）」としての述語が、命題の形成の中でどのようにして成立するのかという問いであろう。それは命題全体における動態的事態の認識論的な成立の問題、言い換えれば魂の働きの問題である。これに関連するストアイオスとセネカが伝える断片を見てみよう。

衝動はすべて同意であり、実践的な衝動は原動力をも包含している。だが、同意する内容と衝動が向かう対象とでは、既に異なっている。すなわち、同意は何らかの命題を対象にするが、衝動が向かうのは、同意の対象である命題のうちにある意味で包含されているところの、述語づけられる

29) 衝動（ὄρμη）は、述語に向けられる、という点は重要である。そこから、傾向性（ὄρεξις）、欲望（ἐπιθυμία）、意志（βούλησις）、選択（αἵρεσις）という倫理学的課題へと向かう問題となる。cf. J. Brunschwig, *ibid.*, p. 158ff.

30) G. ドルルーズの理解したストア派の「非物的な結果（効果）」「出来事（événement）」「（物体の）表面」（第一節での「クリュシッポス効果」）の内実は、およそ人間の思惟が把握する動詞的生成的な「意味・方向性」の次元のものであり、分割されない事物の連続の中に、事物の事象とは別に見いだした動的な事象である。我々にとっては「事実」という表現がそれに近いかもしれない。cf. G. Deleuze, *op. cit.*, p. 87-8（第11セリー）。参照、E. ブレイエ『初期ストア哲学における非物的なもの論』月曜社、2006年。

ものに対してある³¹⁾。

「衝動は述語に向けられる」という考え方は、ブランシュヴィックによれば、ストア派以前の「古期弁証家」が好んだ文法的立場に存するらしい。その考え方をストア派の認識論に即して説明すれば、実際は、衝動の対象は、非物的な述語が表示している物的な実在的事物であり、これに対応して非物的な「意味されるもの（レクトン）」としての述語が成立することになる。ここから、衝動は、物的な魂が、同じ物的な外的実在に向かう物的な運動でありながら、同時に、その運動に伴う非物的な効果 (effet) として、述語において「存立」という過程が考えられてくる。従って、述語の成立の過程を学問的に説明する有効な仕方としては、決して確定した名詞的表現ではなく、確定しない形式（不定法）であることを表す動詞的表現にて表されることになる³²⁾。

ロゴスをもった生きものは、みな、なんらかの事物の表象によって刺激を与えられなければ活動しない。その後で、衝動が起こり、それから同意がこの衝動を認可（確定）する。同意とは何であるかを説明しよう。わたしが歩く必要があると、わたしは実際に歩くが、それはわたしがこのことをわたし自身に告げて、このわたしの判断をわたしが是認しているからなのである³³⁾。

31) *SVF* 3, 171, πάσας δὲ τὰς ὁρμὰς συγκαταθέσεις εἶναι, τὰς δὲ πρακτικὰς καὶ τὸ κινητικὸν περιέχειν. ἤδη δὲ ἄλλων μὲν εἶναι συγκαταθέσεις, ἐπ' ἄλλο δὲ ὁρμὰς · καὶ συγκαταθέσεις μὲν ἀξιωμασί τισιν, ὁρμὰς δὲ ἐπὶ κατηγορήματα, τὰ περιεχόμενά πως ἐν τοῖς ἀξιωμασίν, οἷς συγκαταθέσεις.

32) cf. J. Brunschwig, *ibid.*, p. 161ff ストア派は述語の動的事態を表すために、不定法表現を採用していると思われる。不定法は、名詞であると同時に動詞である。しかも、人称や時制などが「不定」であることが文法的意味となっている。この点をストア派は生かしたのではないだろうか。

33) *SVF* 3, 169b, omne rationale animal nihil agit, nisi primum specie alicuius rei inritatum est, deinde impetum cepit, deinde adsensio confirmavit hunc impetum. quid sit adsensio dicam. oportet me ambulare : tunc demum ambulo, cum hoc mihi dixi et adprobavi hanc opinionem meam.

同意の対象は命題である。従って、例えば「ディオンは歩く」の命題の場合、同意があるとすれば、主述の全体に対して同意は成立する。「ロゴスの生きもの」である人間の場合、知覚することで表象が生じる。その表象がロゴスの表象（φαντασία λογική）となるときこそ、まさに魂の中で言語的な表象が生じるときなのである。主述の揃った完全なロゴスの表象が成立した後、それに対して魂は自覚的な「同意」を行う。命題は真偽の結果がでるものであるから、この同意は「判断」となる³⁴⁾。従って、同意と判断は、外的実在との照合によっては真判断か偽判断かに明確に分かれるものとなる。他方、衝動は、同意が成立する以前の場、つまり表象の成立の場に存しているため、その働きは、主述の全体ではなく、述語部分の成立に向けられている。物的対象における運動変化のあり方を、言語としての動態的性質として捉えようとする魂の運動が衝動である。

「原因」が物的対象であり、「結果」が非物的述語であるのならば、衝動の働きと過程とは、原因としての物体から知覚的な刺激を受けた物的な魂が、刺激に応じて特定の表象の成立へと自らを変容させ、魂の記憶のうちにある動態的表現の中から、対象の描写に相応しい語彙の動詞を表象化する過程や運動のことであると考えることができる。その運動は、最終的に、主語としてたてられた静態的な実体詞について述べる言葉を成果として生じさせる働きなのである。ストバイオスは、かかる述語に向かう衝動を「魂の動き（φωρὰ ψυχῆς）」と明確に伝えている。

衝動を動かすものは、適合的な働きへの衝動を引き起こすことのできる表象にはかならない。他方、衝動は、類の上では、何かに向かう魂の動き

34) 倫理学史にてストア派が、最初に自由意志の契機を思想体系に位置づけたとされるのは、この「同意」にある。知覚表象に対して衝動が始まり、表象が言語的表象に変化し、これに対して同意するのは（または不同意するのも）自由である。実践的行為も、この同意と判断に存している。

ストア派における「述語」について（樋笠）

である。衝動の種のうちにはロゴス的な生きものの中に生じる衝動と、ロゴスを欠く生きものの中に生じる衝動とが見られる³⁵⁾。

ロゴス的な生きものである人間の場合、知覚経験が魂に表象を生み、言語（λόγος）以前の表象が魂に衝動を生じさせ、衝動が物的対象に対して価値的目的性を以て志向すると同時に、その時の魂の思考が非物的な動詞の「存立」に至るという過程がある。この一連の過程は魂の運動であり、衝動は命題成立のために動詞形成に役立っている。「何かに向かう魂の動き」の「何か」が存在の最高類の「何か」であるならば、かかる運動は、まさしく「外的實在（τὸ ὄν）」ではなく「存立するもの（τὸ ὑφεστός）」に向かう運動であることになる。

では、衝動という物的な魂の動きが、動詞的なものへ向かう、とはどのようなことなのであろうか。アレクサンドリアのクレメンスの伝えるところでは次のようになっている。

欲求や欲望、一般的に言えば衝動の対象となるものに対して、祈願もまたある。だからこそ、誰一人として飲み物を欲するのではなく、「飲み物を飲むこと」を欲するのである。相続を欲するのではなく、「相続すること」を欲するのである。同様に、認識を欲するのではなく、「知ること」を欲するのである。国政の場合にしても正しい国政を欲するわけではなく、「（正しく）治めること」を欲するのだから。従って、願望の対象は要求の対象でもあるし、要求の対象は欲望の対象でもある。そして祈願することと欲求することとは、善いもの、入手可能なためになるものを目指して、お互いに対応しながら起こるのだと言う³⁶⁾。

35) *SVF* 3, 169, τὸ δὲ κινεῖν τὴν ὀρμὴν οὐδὲν ἕτερον εἶναι λέγουσιν ἀλλ' ἢ φαντασίαν ὀρμητικὴν τοῦ καθήκοντος αὐτόθεν, τὴν δὲ ὀρμὴν εἶναι φορὰν ψυχῆς ἐπὶ τι κατὰ τὸ γένος, ταύτης δ' ἐν εἰδει θεωρεῖσθαι τὴν ἐν τοῖς λογικοῖς γινομένην ὀρμὴν καὶ ἐν τοῖς ἀλόγοις ζῴοις, 魂の「適切な働き（καθήκον）への衝動」とは、義務（officium）への衝動であり、ここから倫理学を構成する衝動理論がつくられる。それは為すべきことを為す述語の形成に直結している。

ここでは、欲求、欲望、祈願の何れも、衝動という事態に即した行為として関連づけられると共に、衝動が「善いもの」など価値的目的性をもっていることがわかる³⁷⁾。このような仕方では魂の運動を説明しようとするところにストア派の倫理的意図を見いだせる。そこで注目すべきことであるが、衝動の対象が「飲み物」ではなく「飲み物を飲むこと」と表現され、それが語を変えて何度もくり返されており、この確信的な説明自体に対してストア派は厳格な意図をもっているとも見られるであろう。つまり、衝動の対象が、確定された名詞ではなく、動詞の不定法となっている点は、命題形成における述語の成立過程をよく表すと共に、欲望や必要性といった魂の動きと述語の成立とが極めて密接に関連していることもよく示していると言えるのである。ここから、「衝動は述語に向けられる」の意味として、魂の運動の結果、名詞的なもの（静的実在性をもつもの）ではなく動詞的なもの（運動的なもの）が成立する過程をストア派が描いているとすることができよう。このように理解するならば、例えば、「ディオンは歩く」という命題は、非必然命題であるが³⁸⁾、この命題の成立事情を次のように描くことができるのではないだろうか。すなわち、ディオンの（外的実在）の言語的表象（非物体的レクトン）をつくるために、ディオンの見る人が、連続し混合した外的実在の対象のうちに「ディオンの」

36) *SVF* 3, 176, ὦν μὲν οὖν αἱ ὀρέξεις εἰσὶ καὶ ἐπιθυμίαι καὶ ὄλωσ εἰπεῖν αἱ ὄρμαι τούτων εἰσὶ καὶ αἱ εὐχαί· διὸ περ οὐδεὶς ἐπιθυμῆι πόματος, ἀλλὰ τοῦ πίνειν τὸ ποτόν· οὐδὲ μὴν κληρονομίας, ἀλλὰ τοῦ κληρονομησά· οὕτως αὖ δὲ οὐδὲ γνῶσεως ἀλλὰ τοῦ γινῶναι· οὐδὲ γὰρ πολιτείας ὀρθῆς, ἀλλὰ τοῦ πολιτεύεσθαι· τούτων οὖν αἱ εὐχαί, ὧν καὶ αἰτήσεις· καὶ τούτων αἱ αἰτήσεις ὧν καὶ ἐπιθυμίαι· τὸ δὲ εὐχεσθαι καὶ ὀρέγεσθαι καταλλήλως γίνεσθαι εἰς τὸ ἔχειν τὰ ἀγαθὰ καὶ τὰ παραχρῆματα ὀφελήματα.

37) 「衝動」は動物とも連続する人間の生命的活動である。動物の発声と同様、人間も思考に基づいて分節化された物的な音声を発するが、これも衝動に基づく (*SVF* 3, 171)。人間の衝動も初発的には自己保存の衝動となる (*SVF* 3, 178)。動物を越え出る人間らしい衝動は倫理的な「実践的衝動」である (註34参照)。人間は「ロゴス的な生きもの」である以上、実践的活動は如何なる命題を生むかにかかっているのである (*SVF* 2, 988)。

38) *SVF* 2, 201, 「ディオクレスは生きている」は、外的実在に真であることを妨げるものがない場合、「可能命題」となる。「ディオンは歩く」は、外部に妨げるものがなく、真でも偽でもあるという点で非必然的な命題となる。なお「必然命題」の例は「徳は有益である」、「不可能命題」の例は「大地が飛ぶ」である。

ストア派における「述語」について（樋笠）

という名詞を主語として（同一性をたもつ言語表象として）確定させ、同時に、名詞によって分節化された実在の対象ディオンのものへと魂（思考）が動き、その実在の混合的な運動を、言語として分節化させ、つまり「出来事」としての運動の表現へと向かうことになるが、その際、ディオンのうちに、「歩くこと」の必要性乃至欲求を見いだす魂の運動が、運動の効果として動詞的表現を成立させている、といった認識論的風景を描くことができるであろう。

結び

「原因が物体であり、結果が述語である」という思想は、先ず以て、物体のもつ能動性・作用性をストア派が主張するためのものであった。しかし、同時に、その作用の効果として、「非存在」である「存立するもの」をも成り立たせるものであることもストア派は主張していることになる。彼らが、命題という言語上の全体に対する効果ではなく、とりわけ述語に対する効果を語るのは、同意という判断、つまり事柄として真偽が明確になる魂の働きから、それに先立つ衝動の働きを区別するためであろう。なぜなら、先ず、命題の同意は、命題の成立、つまり判断の承認であり、真偽を問える点で、完成された意味が成り立っているからである。それは働きではなく働きの成果である。成果であるから確定された静的な状態のうちにある。これに対して、衝動は、その名前に相応しく最初から運動である。その運動は、運動らしく動きを表わす言語的事象へ、そして「動詞」の成立へと向かう。動詞だけでは、判断にはならず不完全なままであるが、その宙づり状態は、成果以前の不確定な動的な状態のうちにある。換言すれば、確たる「意味」は成り立っていない。ストア派理解のためにドゥルーズを援用するならば、「意味」とは、定まらないまま流動しつつも自ら生産してゆく動態であると言うべきであろう。そのために、ドゥルーズは、意味事象のすべてを包括する「何か」を、意味事象のうちで最も典型的な

「意味」的事象である動詞と結びつけ、そこにおいて「意味」というものの本質的な存在性格を示したかったのではないだろうか。こうして、ストア派を「プラトン主義の転倒³⁹⁾」を為した思想として、ドゥルーズはストア派を正しく理解し、その価値の転倒を価値づける立場から、方向性をもたない意味（non-sens）をも意味と為し、意味を生成する場を、積極的に「表面」と呼ぶのである。確かに、ストア派はプラトンのイデア論を否定したと、後の哲學家が伝えている⁴⁰⁾。共通の本性を認めず、個物の存在のみを實在とするストア派は、伝統的哲学が重んじてきた同一性というものに対しては距離をおくところがある。万物流転とロゴスの思想をもつヘラクレイトスに親近感をもつストア派は、従って、生成の哲学と呼ばれるに相応しい側面は確かにもっていると言わねばならないであろう。古典期も現代も同様に、同一性の神話が問われているのである⁴¹⁾。

39) G. Deleuze, *op. cit.*, p. 16. (第2セリー)

40) *SVF.*, 2, 359-365.

41) ストア派は「存在(είναι)」と「存立(ὕφιστάναί)」の対比によって、存在論と意味論とを重ね合わせた議論をした。「存在」が名詞的であるのに対して「存立」は動詞的であるとする、ドゥルーズと共有する視点は、同一性と生成性という対立の視点をも巻き込むであろう。実際、ストア派の影響を受け多くを受容したプロティノスは、両者の対比を利用して、一層、その形而上学的（存在論的）区別を明確にすることで、「存立」の生成（働き）の特性を浮き彫りにしたとあってよい。これについては『「存立(ὕφιστάναί)」について—ストア派とプロティノス』（第22回新プラトン主義協会大会シンポジウム提題（2015年9月20日））にて、両思想が含む「存在と存立の対比」の視点の比較によって、思想史的には、その影響関係について高い蓋然性があることを発表した。